

たかなべ
むかしおなし

第二集

— 民話・伝説・物語・由来 —

ふるさとを伝える会
高鍋町教育委員会

(東都原古墳供養高鍋大師仏像)

高鍋町道具小路 岩岡保吉翁(昭和五十二年一月 八十八歳で死去)が私財を投じて建立された。

昭和四、五年の頃、古墳の盜掘があり大層荒らされた。翁は「これはもったいないことをしたものだ」と思い、古墳の靈の供養をしたいと考えられ、弘法大師と八十八ヶ所の仏を祀ることとされた。

昭和六年頃、大分県臼杵から石工を雇い、小丸河原で彫刻を始められた。その間自らも彫刻技術を習い覚え、堂内の弘法大師像を自作安置された。御堂は十一米四方の建物で、内部組立ては自然木で節、枝を生かし、丸木柱の頑丈な造りになっている。又、別棟に茶室も建てられている。

堂の裏手には、地下道五十米があり、極楽浄土を意味して開削された。石仏は七百余体あるが、その代表的なものとして次の石仏がある。

- | | | |
|-----------|-----------|---------|
| ○ 弘法大師像 | ○ 不動明王像 | ○ 稻荷大神像 |
| ○ 十一面觀世音像 | ○ 十二薬師如来像 | ○ 天照大神像 |
| ○ 風の神様 | ○ 雷神像 | ○ 火除け神像 |

はじめに

『高鍋むかしばなし第一集』を昭和六十一年度に発行いたしました、大変好評を戴き、その数千五百余部を頒布するにいたしました。

したがいまして広く町内外の方々の目に止まり、御覧戴きましたことは、郷土の一部面を探って戴いたことにもなり、収集にあたっていたいた方々をはじめ、編集に当たりました当教育委員会の望外の喜びでございます。ここに皆様方の御好意、御援助に対し心から厚く感謝申しあげます。

古くから栄えてまいりました高鍋でございますが、特に藩政時代における高鍋の隆盛を誇示するかのよう、に数々の民話・伝説・物語を集約することができました。

昔の風物や自然の豊かさ、藩公の治世や、庶民のあふれるばかりの知性と人情などが、いたるところに伝承されているようであります。また、頓智、ユーモアなどの笑いかもし出されながら、教訓とも受けとれる物語など味わい深いものであります。

このように考えてまいりますと、こうした伝承文化の中にも高鍋の伝統は息づき、育ってまいったものと思えますし、そうしたことに思いを馳せながら、これからの高鍋発展の一助にしていただければ幸いに思います。

収集にあたりましては、高齢者ボランティアグループ「ふるさとを伝える会」にお願いいたしました、大変な御苦労があったようでございます。頼りとする古老の方々は年毎に少なくなれますようで、切角、訪ねましても、床に着いておられたり記憶がうすれておられる等、思うに任せないことの連続でございました。ここに、皆様方のお骨折りに対しまして心から厚く御礼申しあげます。

昭和六十三年一月

高鍋町教育委員会

教育長 岩 永 高 徳

目次

はじめに

第一部 民話の部

○ ひょうすんぼの雨宿り 1

○ 尾鈴山の話 2

○ 石になった赤ちゃん 5

○ 狐のくれた金の首巻 6

○ トンゴシの話 9

○ かっぱの手 11

○ 六ろちんと七ろちん 13

第二部 伝説・昔ばなしの部

○ 川上神社の話 16

○ 秋月清観公の仁政 18

○ 痛快・小丸川乗り切り伝 22

○ 毛比呂計神社 24

○ すね神さん 26

○ やんぶし屋敷 27

○ 種樹公の威徳 29

○ わらじの絵 33

○ 蚊口「かきとり」の怪 35

○ 昔のお里廻り 38

○ 身の毛もよだつ谷坂の怪 40

○ 夏の夜の不思議 41

○ 鳴野の千石船物語 44

○ 馬ん糞橋の化けもの 45

○ 不思議な不思議な話 47

○ 元高鍋のシンボル二本松の話 50

○ 高鍋藩きっての大力男 52

○ 虚無僧の墓 55

○ 宮田川にいた「ひょうすんぼ」の話 59

○ 昔の正月行事 61

○ 不思議な石ころ 63

第三部 由来・思い出の部

○ 「円福寺」焼き打ちから免れた話	65
○ 地名「けど」の話	67
○ 高鍋豆腐の由来	68
○ 鯨橋のいわれ	69
○ 川田の寺の物語	71
○ 鴨野での思い出	72
○ 高鍋のウクライナ	74
○ 上江小学校の思い出	76
○ 荷馬車とわらべ	88
○ 稲荷さんと小丸川の思い出	80
○ 大正時代の思い出	82
○ 龍宮城のおじいさん	84
○ 昔の下屋敷と子どもたち	85

編集後記

ふるさとを伝える会会員

第一部 民話の部

ひょうすんぼの雨宿り

脇 浦カネヅル 七十七歳

私がまだ小さい頃、野首の半兵衛さんというおじいさんから聞いた話です。

ある年の夏の雨がしょぼしょぼ降る、大変むし暑い晩のことです。半兵衛さんは、ふと妙な物音で目が覚めました。「はてな、何だろう」とぶつぶついいながら、床から起きあがり、土間の方へ歩いていきました。入口の戸をそつと開いて見ますと、どうしたことでしょう。軒下にはたくさん「ひょうすんぼ」がずらりと並んでいるのです。よく見るとどうも雨宿りをしている様子なのです。半兵衛さんはびっくりしましたが、息をこらし、物音をたてないように、尚もじーっと見ていますと「ひょうすんぼ」たちは、何やらガヤガヤとさわぎたてながら時々「ヒョウ、ヒョウ」と鳴いているのです。

こんな様子を初めて見た半兵衛さんは、とても物珍ら

しく、時のたつのも忘れて見入っていました。

やがて、降っていた

雨が小止みになると、今ま

でさわいでいた「ひょうすん

ぼ」たちは、思い思いに飛ん

だり、はねたりしながら宮田

川の方へとおりにいくのです。

その様子がとても可愛ゆく、

愉快なので、半兵衛さんはこ

の「ひょうすんぼ」がすつか

り気に入ってしまった。

ところが、次の雨の日の夜

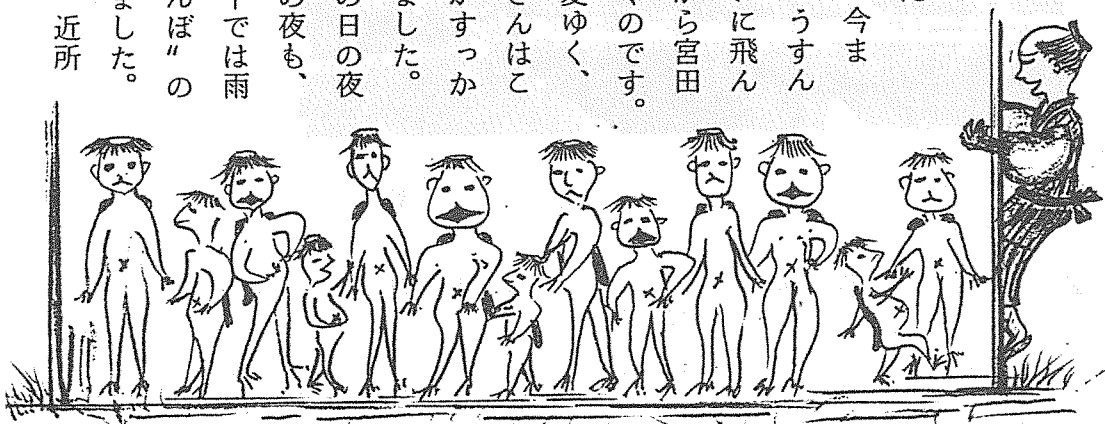
も、又、その次の雨の夜も、

半兵衛さんの家の軒下では雨

宿りする「ひょうすんぼ」の

可愛い姿が見られました。

その中このことが、近所



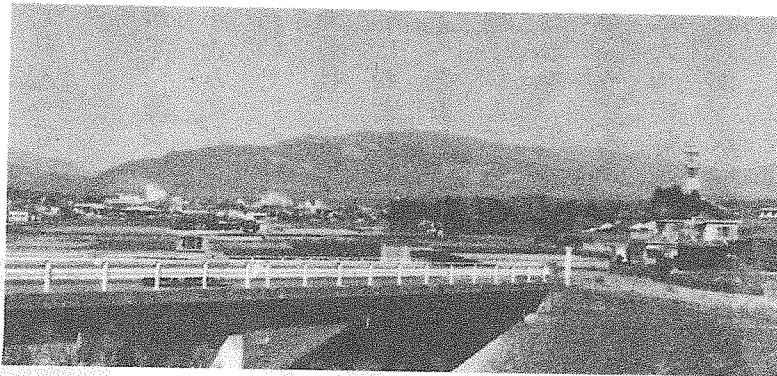
の人々の評判になり、雨の夜になると半兵衛さんの家には可愛い「ひょうすんぼ」の姿を一目見ようと、大人や子どもなどたくさんの人たちがおしかけてきたということです。

半兵衛さんから聞いたところでは、「ひょうすんぼ」は春のひがんから川に下り、秋のひがんまでに山にのぼっていくということで、多分その行き帰りに、にわか雨にあった「ひょうすんぼ」が、半兵衛さんの家の軒下をかりていたのだろうということでした。

時の流れは早く、農業高校寄宿舎の運動場の中程に建っていた半兵衛さんの家は、今は見ることができませんが、私の頭の中には、今でも半兵衛さんの古びた家と、半兵衛さんの面影が焼きつき、なつかしく思い出されます。

私も姉弟は、この話をあきもせず、半兵衛じいさんからいくども、いくども聞いたものでした。

尾鈴山の話

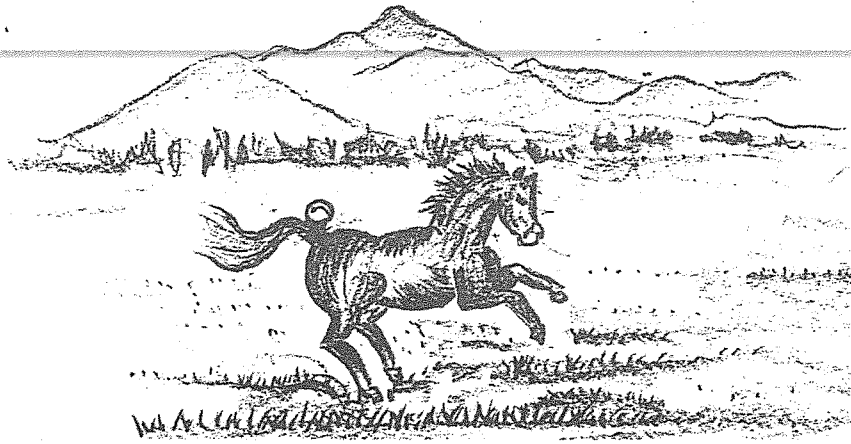


木の瀬

古江 悦郎

六十三歳

若山牧水は、「故郷の尾鈴の山の愛しさよ 秋も霞のたなびきており」と謳い、安田尚義は「尾鈴山ひとつあるゆえ黒髪の白くなるまで国恋にけり」と故郷に想いを馳せました。又、東西小中学校々歌には「北に仰ぐ尾鈴山」「青い尾鈴の美しさ」「西に緑の山脈を」「尾鈴嶺のやさし



姿よ」などと歌い謳われている山、尾鈴山。私も朝に夕べにその清らかな山容と、美しい山肌を眼に映しながら日々生活を営んでいます。尾鈴という名のいわれには、次のような話が残されています。私が都農町の小学校に勤務していた折、古老より聞いた話です。昔々のことで、いつの頃かはわ

かりませんが、ある年の秋の日の朝のことです。人々が心地よい眠りから覚めようとする頃、遠くの方からカツ、カツ、カツ……と、軽やかな物音が聞こえてくるのです。はてな？ 何者だろう。と思いながら耳をすませていますと、その物音はだんだん近付いて、あっという間に遠ざかっていくのです。この怪しい物音はあちこちの村人達の耳に入り、一体何者だろう、どうしたことでだろうと頭をかしげるのでした。しかし、その怪しい物の姿を見た者は誰一人いないのです。それもその筈です。物音が近付き遠のいていくのは、あっという間で、まるで疾風のようなのです。

不思議に思った村の若者達は、相談してその正体を見届けることにしました。次の日の朝早く数人の若者たちは、とある辻の物陰に隠れて怪しい物音が近付くのを待ちました。やがて東の空が白み始めた頃、いつもの通り遠くの方から例の物音が近付いてきました。若者達はじっと息をこらして、音のするほうを見つめています。カツ、カツ、カツ……いつもの朝よりゆっくりとした速さのようです……と、朝もやの中から忽然と現れたのは、実

に見事なくくましい白馬なのです。銀色に輝いたたてがみと長い尻尾を、朝の涼風になびかせながら、足音軽くまるで絵に描いたようでこの世のものとも思えない、りっぱな白馬なのです。若者達は今まで見たことも、聞いたこともない見事さに気も心も奪われ、只呆然と見送ってしまいました。それも全く束の間のこと、十分見極める余裕もなかったのです。若者達は次の朝再び確めようと、朝早く出かけて待ちかまえました。昨日の時刻になるとまたもや白馬が、りりしい姿を現したのです。しかも尻尾のつけ根には光輝く大きな鈴をつけているのです。ギラギラ輝く毛並み、澄んだ足音に、美しい鈴の音色が音楽を奏でるようで、いつしか白馬の雄姿と美しい音色に、またも心を奪われてしまいました。

このことは、次々に村人達に伝わり、たちまちのうちに大評判になりました。村人達も一目見ようと朝早くから待ち構えて白馬を見たのです。白馬はその度にいかにも誇らしげに足どりも軽やかに、美しい鈴の音を響かせながらあちらの村、こちらの村を駆けていくのです。中には自分のものにしようと後を追うのですが、とても攔

まるものではなかったのです。

ところが、村や野原を駆け抜けた白馬は、きまって山奥の方へ消えて行くのです。そんなことがあって誰いうとなく、あの白馬は山の神馬に違いないというようになり、後を追うのを止めましたし、白馬が消える山のことを白馬の鈴にちなんで『尾鈴山』と呼ぶようになったということです。